

2011年度 建築設計演習カリキュラム

1年	設計基礎演習II □小空間の設計「散策路のレストハウス」
2年	建築設計I □住宅の設計「…家のすまい」
	建築設計II □オフィスの設計「まちの出版社」 □美術館の設計
3年	建築設計III □都市に開かれた屋内競技施設の設計「スミングプール」
	建築設計IV □小学校の設計 □病院の設計 □集合住宅の設計「集合住宅を含む地域核の計画」
4年	卒業設計



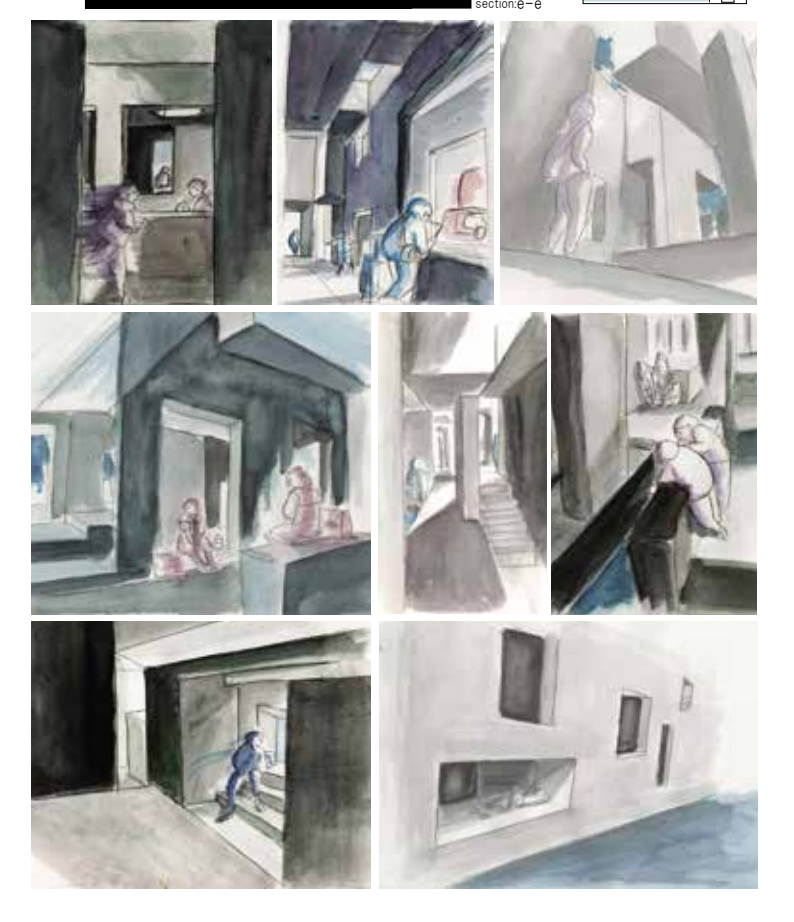
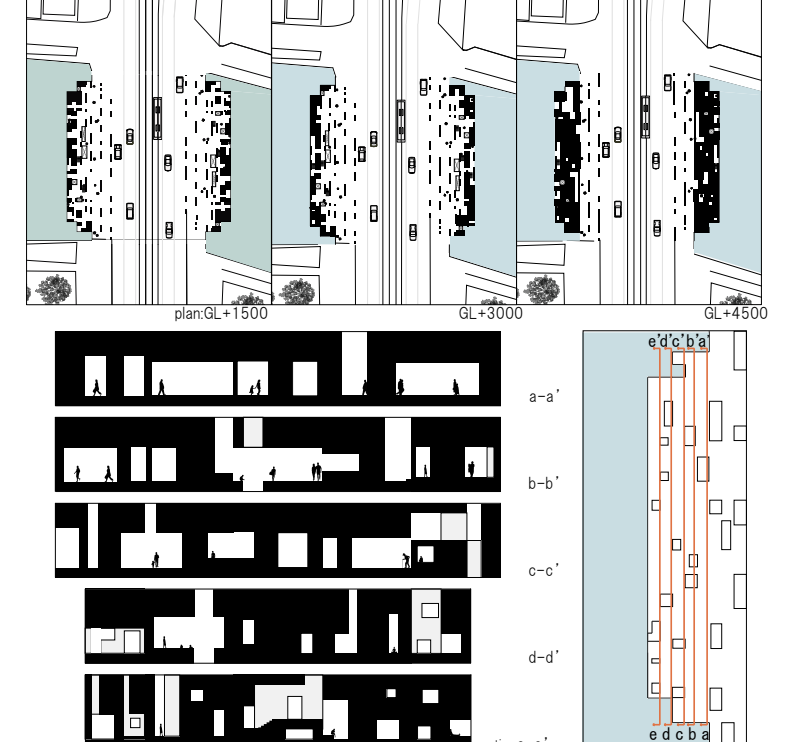
学内合同講評会

日時：2012/02/17
場所：鹿児島大学稲盛会館
今回の作品集掲載の設計課題作品は、2月17日に行われた学内合同講評会に出選されたものです。(写真は講評会の様子)

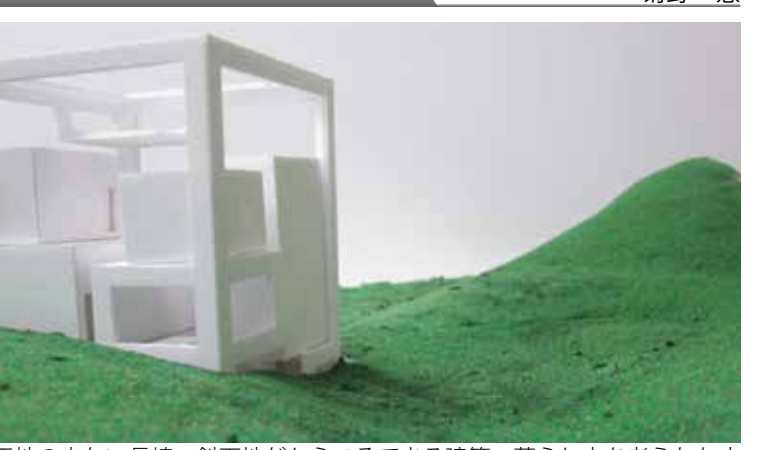


人道路橋 池崎 晴菜

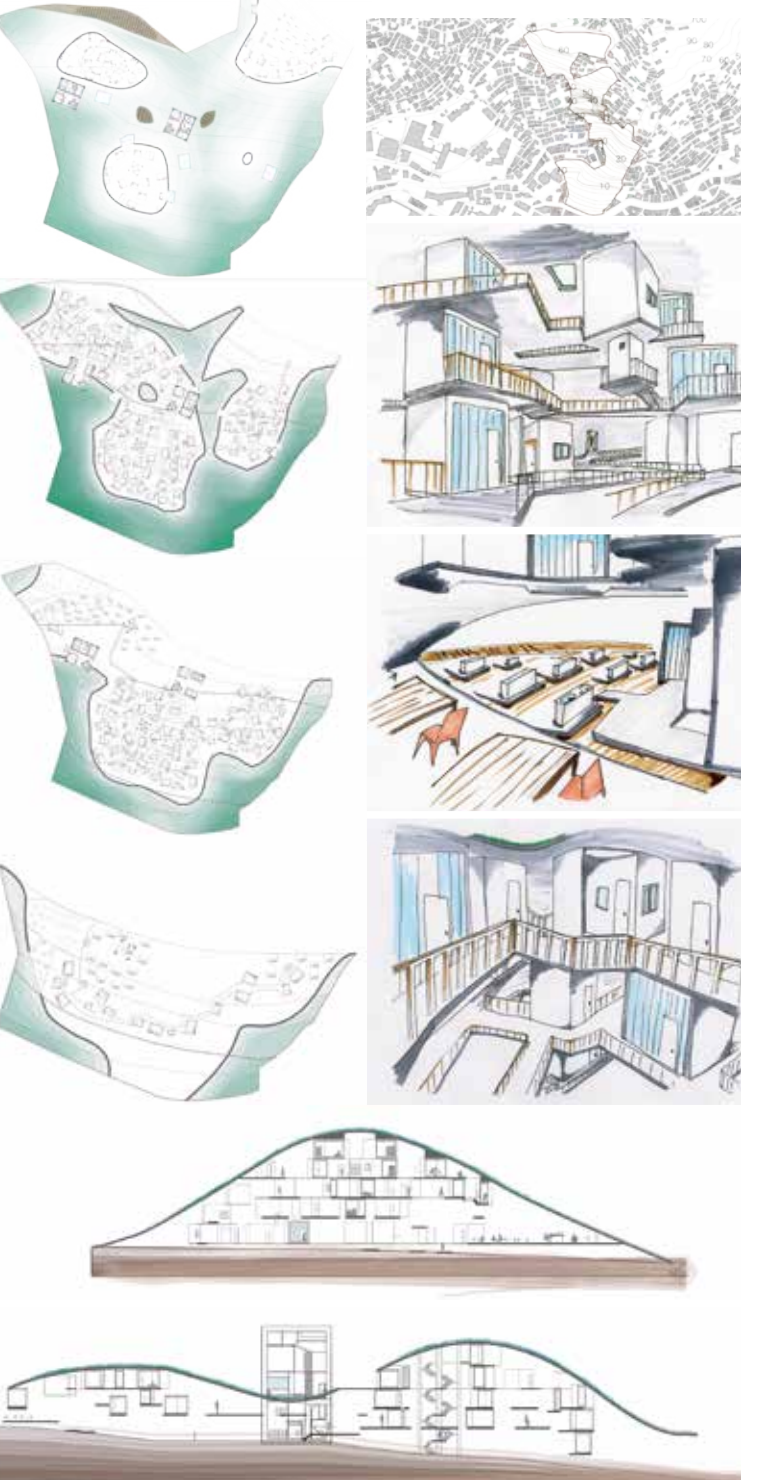
交通機関が発達した橋である道路橋に、人が留まる場をもつ人道橋を落とし込んだ「人道路橋」という新しい橋のかたちの提案。橋の端部にいくにつれ壁の厚さ、開口の大きさを変化させ、人々の視線が交錯する中、人々が留まるを空間つくる。交通機関が通る場と人が歩行する場や留まる場を緩やかにつなぐ。



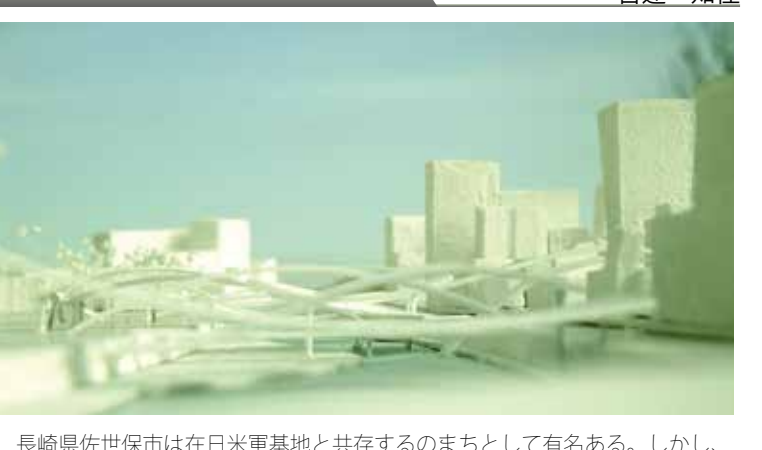
ななめじめんの一枚屋根 菊野 慧



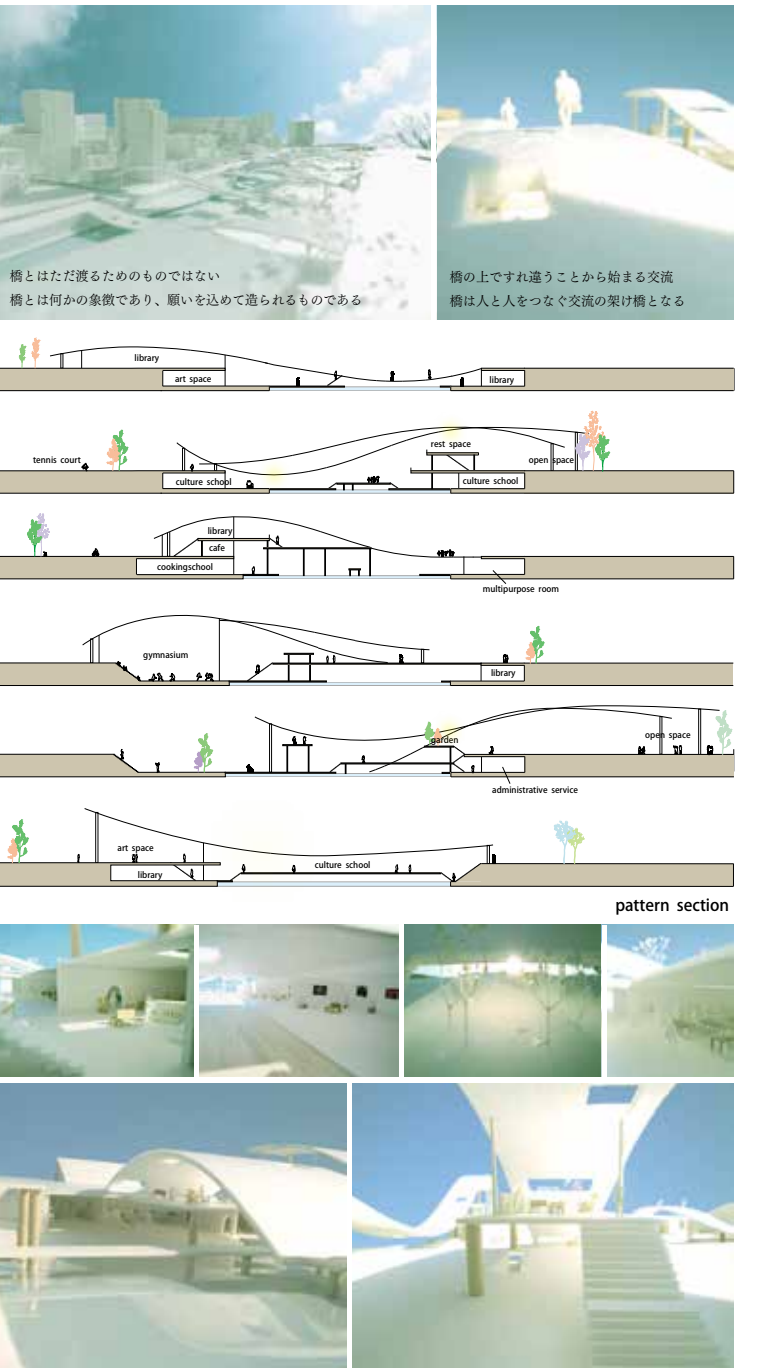
平地の少ない長崎。斜面地だからこそできる建築、暮らし方を考えなおす提案。斜面に対して一枚の大きな屋根をかけ、その屋根は斜面をそのまま地形で残すための地盤となる。斜面地の住宅に持続性をもたらすため、斜面の暮らしに観光としての宿泊施設を付随する。



かけ橋× 古達 知佳



長崎県佐世保市は在日米軍基地と共存するのまちとして有名である。しかし、アメリカ同時多発テロ事件以降、佐世保川右岸のニミッツパークで毎年催されていた交流イベントは開かれなくなり、これらの場所は市民にとって近くで遠い存在となってしまっている。この提案は、友好の架け橋となることを願いつけられたアルバカーキ橋の上流に新しい交流の橋を架けるといものである。橋とはただ渡るための通過動線としての機能だけでなく、滞在空間を加え、とどまらせることで交流の機会をつくる。そして、ここを訪れた人に対岸の新しい見え方を提供し、新たな関係性のもとに相互に向き合い、滞在することを意識させる空間を計画した。



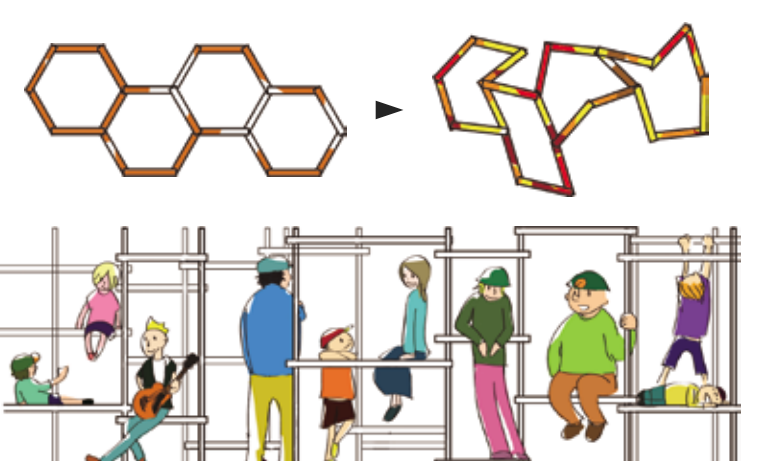
Architectural Exhibition 54th

2011.9.17(sat)-19(mon)
@Maruya gardens 7F



建築でつながった私たちが、建築で人をつないでいく。

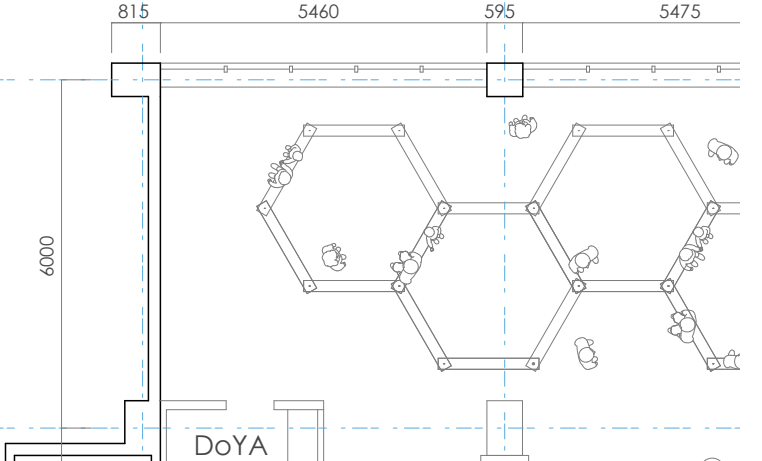
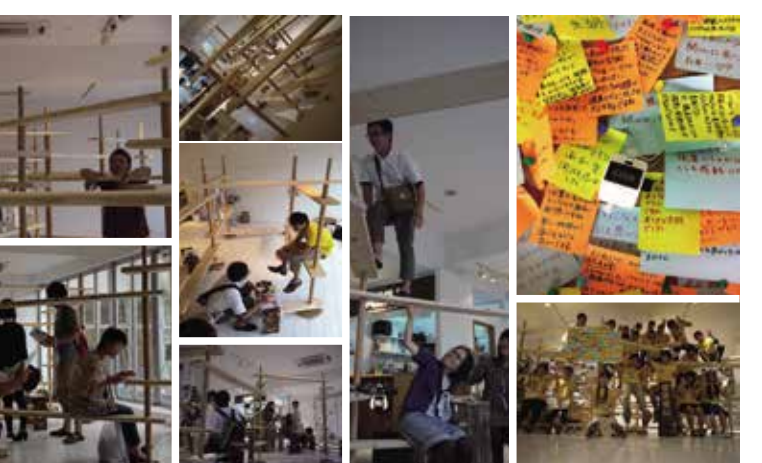
人と人のつながりの尊さ。
2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震が発生。テレビから流れる映像にはみなショックを受けました。しかし、それ以上に手と手を取り合い助け合う被災者の方々の姿に感動し、僕たちは人と人のつながりの大切さを教えられました。今年のテーマは「建築でつながった私たちが建築で人をつないでいく。」です。建築展の話し合いを進める中で、やはり震災から感じたつながりの大切さは皆が持つ共通の認識でした。思えば、今こうして建築学科の皆とつながりを持てたのは、「建築」があったからこそです。



建築展は毎年3回生を中心に、自らの手でテーマを決め、企画し、展示物を創り上げ、さらには広報までを行うイベントです。これまで学んできた建築について自分たちが今思うこと、考える事を学外に出て表現することで、社会と接点を持ち、改めて考えるきっかけを持つものです。今年はずなかりをテーマに可変する建築を1/1スケールで提案します。



来場者の方々には建築という今、自分たちが学んでいることで人と人のつながりを感じ、考え意識してもらいたいと思いました。建築展を終えた今、私達自身が人と人のつながりの大切さを再認識することが出来ました。来場者の方々にもそのきっかけが作れたのであれば幸いです。今回の建築展を開催するにあたりご支援下さいました企業のみならず、雨の中ご来場下さいました皆さま、学内にいてはできなかった貴重な体験ができ、多くのことを学ぶことが出来ました。誠にありがとうございました。



鹿児島大学工学部建築学科 建築設計作品集

INFORMATION
2011年度学生設計課題
散策路のレストハウス
…家の住まい
まちの出版社
美術館設計
都市に開かれた屋内競技施設
小学校設計
集合住宅を含む地域核の計画
卒業設計
第54回建築展「建築でつながった私たちが、建築で人をつないでいく。」

鹿児島大学工学部建築学科 建築設計作品集 aae vol.7
編集 中野 智弘 (鹿児島大学大学院理工学研究科博士前期課程2年)
編集協力 小山 雄資 (鹿児島大学大学院理工学研究科助教)
監修 鹿児島大学工学部建築学科

鹿児島大学 工学部 建築学科
http://aae.aae.kagoshima-u.ac.jp/
office@aae.kagoshima-u.ac.jp
〒890-0065 鹿児島県鹿児島市都元1丁目21-40

□散策路のレストハウス

(設計概要) 敷地面積：216㎡
鹿兒島市街地に甲突川に沿って整備された散策路がある。沿道には交通拠点や史跡が点在し、眺望にも富むことから人通りも多い。今回はその一角に情報発信を目的とした「レストハウス」の提案を求める。

所居室
事務空間 (20㎡) ……スタッフのトイレと給湯室を含む休憩・展示空間 (50㎡) ……自販機、コインロッカー、トイレを含む、駐輪場

光が巡る家 亀田 翔

設計意図としては桜島を眺める明るいレストハウス。桜島の景色を切り出す、レストハウス正面の大開口部。輝く緑に満たされる、1階西側の開口部。レストハウス正面からの光を遮らない特微的な傾斜屋根。空を写し出し、階段により天へと上がる感覚を演出する屋根の小窓。あらゆる方向から光が射しレストハウスは光で満たされる。

遊歩道の終着点 木村 明寛

直径 10m 中心角 90° の円弧をそのまま建物の外観に用いた。甲突川を縦断する道路方向に円弧状の屋根を向け、建物の存在感を出し、反対の芝生側には全面ガラス張りすることで威圧感を軽減させた。芝生に面したエントランスに併設した2階へと続く幅 4m の緩やかな階段が川沿いや市電沿いの歩行者の憩いの場となる。

外階段のある家 木村 拓

“外と繋がる”をコンセプトに設計を行った。甲突川の河川敷を散歩する人々を扇形の屋根につくった外階段からレストハウスの中へと誘導していく。外から内へと続くスムーズな動線を設計することで外と内の繋がりを強め、河川敷へ散歩や休憩にきた人々が立ち寄り易いレストハウスを目指した。

winding road 高須 八千代

つながる、広がる 島中 美穂子

コンセプトを「流れ」とし、誰でも気軽に立ち寄れる空間とアプローチを提案する。全体をS字型にし、歪曲した壁の部分にスリッドを入れ、その隙間から光を取り入れる。天使のはしごのような光を生み出し、時間帯により光の入り方も変化する。また、屋根の対角線上の頂点同士レベルを変えることにより、外から中へのギャップを与える。

Prismatic-House ベン・ライサミ

三角柱を大空間に大胆に突き刺して機能を集中させることにより、ダイナミックでスタイリッシュな空間を提案する。北では桜島を背景とする鹿兒島の街を、南では路線が交わり合う交通局を眺められる展望台も設置。また、大小形様々な三角形の面を多く取り入れることにより、ある種の統一感を醸し出すとともに変化に富む空間を構成する。

Adagio 屋敷 尚紀

様々な所からの利用者が気軽に利用できる施設であることを形に表す為に、三角形と円を合わせたような有機的なものになった。川に沿った遊歩道の景観に溶け込むように、穏やかに単一な印象の外観仕上げとし、内部空間は周囲の木陰と木漏れ日が入り込んで来ているかのように人が入るように考えた。

□…家のすまい (設計概要) 各自すまい手を設定し設計を行う。手掛かりとして①それを専門家としている人(漫画家など) ②ある性質の人(情熱家など)などを設定し、住まい手の顔が見える家とその家族の家の提案を求める。

1. 鹿兒島市春日町 (敷地面積: 150㎡) 2. 鹿兒島市下荒田 (敷地面積: 170㎡)

つながる、広がる 島中 美穂子

sasayaka 山元 寛弥

本課題では「愛犬家の家」として設計を行う。「いつでも犬のそばで過ごせる空間」を住人からの要望とし、室内犬、室外犬を通して室内外の繋がりを土間を広く造ることで提案する。さらに空間を大きくとることで、犬による地域との繋がりを生み出す。

make oneself 奥山 尚美

料理家の妻と夫、二人の子どものいる家庭という設定のもと設計しました。吹き抜けのあるキッチンを中心に置くことで、声・料理の音・香りでは見えなくても違う形でコミュニケーションをとれるように。料理家に限らずどの家庭にも料理が中心ということで、ささやかでもその暮らしがより良くなればと思います。

□まちの出版社 (設計概要) 敷地面積：700㎡ 中心市街地を構成する代表的な建築物としてのオフィスビル。その中で、多層建築の設計手法やレンタルビル比の考え方に基づき平面計画、都市景観などについて学ぶ。

所居室
事務室部門：執務室、役員室、応接室、情報発信・交流部門：展示、販売、喫茶など、共用部門：玄関、受付、階段など、その他

ガラリー 石本 真弓

ルーバーはファサードを彩ったり目隠しするだけのものではない。横ルーバーは視線と太陽からの直接光を遮り、快適な作業環境をつくる。縦ルーバーは人の視線にリズムをつけ、内部への興味を湧き立てる。内外をゆるやかにつなぐ「ガラリー」は、市民とオフィスビルとの関係を「ガラリー」と変えるアイテムとなり得る。

みちくさ 伊藤 郷志

「みちくさ」と名付けたこのオフィスビルは、鹿兒島の情報を提供する出版社であり、鹿兒島の人気スポットや旅行プランなどを公開する。まっすぐ進むのではなく、少し回り道をしながら鹿兒島を知って行くことをコンセプトとし、みちくさを外観の曲線・内部の機能に表現している。

make oneself 奥山 尚美

敷地は、小学校や公園に隣接した天文館の一角である。「市民との関わり」をコンセプトに、特に目的がなくても気軽に立ち寄れる場所として図書館を併せ持つ出版社を提案する。1、2階を市民活動の場とし、1階の図書館と2階のカフェは吹き抜けを介してつながる。1階の図書館には、この出版社が出版した本が並ぶ。

□美術館 (設計概要) 敷地面積：25,335㎡ 長島美術館(鹿兒島市武)をより魅力的な美術館とするための建替え計画。地域や周辺の要求に配慮し、様々な空間を機能的に整理しながら設計を行う。

所居室
展示部門：常設展示室、企画展示室など、収蔵保管部門：荷解梱包室、収蔵庫、倉庫など、調査研究部門：学芸員室、補修作業室など、管理運営部門：事務室、受付、館長室など

Hide and seek 島中 悠里

Visionary Collection 美谷 舞

敷地は桜島と鹿兒島市を望む丘の上。人々は日常から切り離されながら、美術館という異空間へと導かれる。明と暗の空間、空中に設置された展示室を行ったり来たりすることにより、高低差のある通路のような展示空間となる。観覧が終わると美術品を見るかのように桜島を見て、普段気づかない雄大さを知る。

make oneself 奥山 尚美

建築がそのまま大地となり、自然と一体化した美術館を提案します。丘に抜ける風や、空の光をそのまま取り込んで、外部空間に近い環境を生み出します。その中で、アートが建築の内側と外側、まちとまちを繋げていくように振る舞います。

□都市に開かれた屋内競技施設「スイミングプール」 (設計概要) 敷地面積：19,000㎡ 機能性・デザイン性・架構の力学的安定性の調和をとり、都市に対し開かれた付加価値の高い屋内競技施設を提案する。

所居室
競技用プールエリア、サブホールエリア、観客ホール、バックヤード部分、その他

One more 西森 裕人

Destination 横尾 拓也

敷地は鹿兒島市山下町の市役所の北側に位置し、その他に医療・交流センター、黎明館、小学校など中心市街地として様々な利用者を対象とした屋内競技施設の計画が求められる。そこで、屋内競技施設としての空間だけでなく、市民が自由に利用できる空間をつくり、周辺の環境と連続的に繋ぐことで日常的に利用される都市空間の設計を行う。

make oneself 奥山 尚美

鹿兒島の主要施設が密集した本敷地に、周辺施設との連携を図りつつ街を活性化させるためのシンボルとなる大空間施設を提案する。シェル構造によるシンボリックなファサードと機能の簡略化による、わかりやすい平面構成によって多くの人の目的地となる。四方に開かれたHPシェルは中心へと人を呼びこむと同時に外部へと活気を放出する。

□小学校 (設計概要) 敷地面積：19,000㎡ 児童学習環境、周辺環境を配慮し、地域や社会に対し十分な機能を果たす小学校の提案。

敷地面積：18,000㎡ 敷地面積：19,000㎡

1. 名山小学校街区 2. 八幡小学校街区敷地

彩る小学校 関 恭太

子供たちの勉強の成果や作品によって彩られていく小学校の提案。正三角形を3つ重ねたプランは子どもたちの走り回る回遊性をつくりつつ、3種の外部空間を生み出し、子供たちがさまざまな場所で遊ぶことができるようになる。三角形の各辺には子どもたちの成果物が展示され、地域の人々や保護者に参観してもらおう。この参観が終わるとギャラリーは白紙に戻り、また子供たちの手によって新たに学校は彩られていく。

色を重ねるように、層を重ねる。 巡 見りえ

01. Layered diagram
こどもが遊ぶ空間をつくる 階段上のstageをつくる 交差点を交差させる ひとつの空間をつくる

make oneself 奥山 尚美

こどもは色がある。色を重ねることですくすく育っていく。この色を層に例えて表現する。層を重ねることによって様々な階高の空間から、子供たちの際限のない動きが、走りまわらぬあしが、屈託のない笑顔が見え隠れする。地域の人たちに建物を透過して見守られながら成長する、こどもたちのための小学校。

□集合住宅を含む地域核の計画 (設計概要) 敷地面積：44,700㎡ 都市部から少し離れた郊外に200戸の集合住宅を計画する。公共交通を中心とする拠点を持つコンパクトな地域構造の住宅地を計画し、豊かな居住環境・生活環境の提案を行う。

設計条件
1. 集合住宅200戸(世代交代、新規入居者が期待できる住居を考慮のこと)
2. 小売店舗、保育園、公共施設など
3. 公園(魅力的な屋外空間)

行き交うまち。 隈 友輔

出会い中廊下 富井 拓也

make oneself 奥山 尚美

この集合住宅は、どこに向かうにも建物を縦断する中廊下を通る。人々は、この中廊下で日常的に顔を合わせ、あいさつを交わし、交流が始まる。住人達は、スケルトンインフィルを活用し、建物を自分のマイホームのように作り変えながら、趣味の空間や広い緑地で交流を深め、家族のようなコミュニティを形成していく。